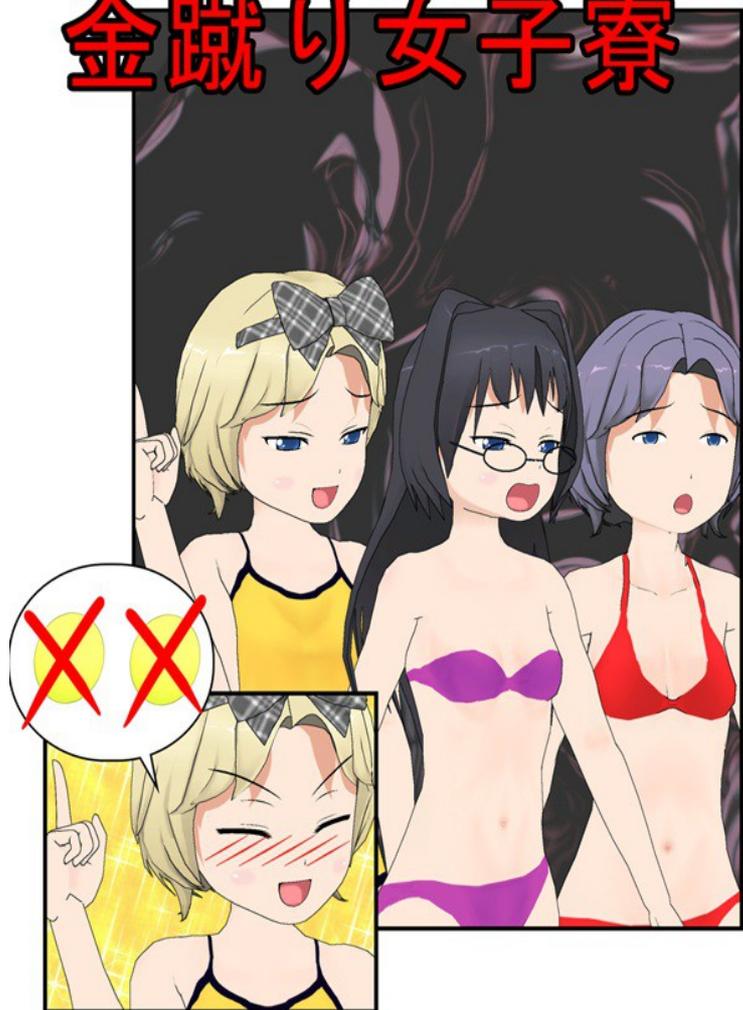


# 金蹴り女子寮



玉子王子 著

一章 女子寮に忍び込むなんて、キ〇タマがいらならしいねー

「まあいいんじゃないか？ テレビショッピングでも？」

高級なバー。

横で酒を飲むのは、一〇年以上前にタッグを組んでいた男。

お互いプロレスラーだった。

人気の絶頂で引退。いいところで終えたと思っている。

そのあと、剛田は芸能界入り。

細野は焼き肉屋を始めた。

「責任もないし、金もいいんだろ？」

「従業員がいっぱいいるお前と比べたら、責任なんてない気楽な身分ですよ」

「おいおい、そういう事言ってるんじゃないって」

会話が途切れる。

人一倍体格がいい男二人があまり盛り上がりせず、会話が途切れている姿にバーテンも不安げだ。

——細野の野郎、ちょっと焼き肉屋が調子いいからって何が「責任ないし」だ。俺が売れてるときは、焼き肉屋なんかより何倍も金入ってたんだよ。

しかし、今やテレビに出る機会はテレビショッピングぐらいとなってしまった。もともとバラエティーに結構呼ばれていたのだが、同じような「元スター格闘家」は毎年引退して芸能界入りするわけで、同じ経歴では前からいるほうが飽きられるのは当然。

特に売りもない剛田は芸能界に居場所がなくなりつつあった。

——いっそ、SNSで馬鹿ツイートでもやっちゃおう？ マスコミの**ケツの穴舐めるツイ**

**ト**やればもうちょっとは使ってもらえるかも……どうせ、失うものなんてないしな？ 中卒でプロレスラーになって、芸能界入って……特に何かがあるでもない。ファンももうあんまりいない……というか、「あんまり」ってつけていいのかよくわかんねえレベル。どこで間違ったんだ？

黙っていると、嫌なことを考えてしまう。

大体同じところにいた男が、今や実業家なのだ。

それでも、今、嫌味を言った。

言ってくれた。

——完全に自分が上だと思ってたら、嫌味も言わねえだろ。まだ「テレビに出てるスター」的な感じに見えるのかもな、こいつには。俺はまだこいつの横に立ってるのか。あの引退の日みたいに……会社入って、初めて会ったあの日みたいに……

コーチやら先輩やらに毎日殴られて一緒に泣いていた日々。戻りたくないが、今思い出せば悪くなかった気もしないでもない。

未来にスターとしての人生が待っているとわかっている今から振り返れば。

——でも、そのスターの後の人生はこの煮え切らない感じだ。まあ、貧乏ではないが……スターと

しての輝きが一万なら余裕で一だからな……

と、横を見ると細野も見て来ていた。

「剛田、昔は楽しかったなあ。いや、活躍してた時期じゃなくて、もっと前なあ」

「下積みのころは毎日殴られて地獄だっただろ」

言いながら、胸に何か広がるのを感じる。

——こいつも似たようなこと考えてたのか……

立ち上がる細野。

「ちょっと外出よう」

路地をいく、巨体の男二人に、皆道を開ける。

それはそれで嬉しいのだが、「あ、ジャスティス剛田だ！」「わ、ホントだ、**ジャス様**だ！」というような声が一切聞こえないのが悲しい。いや、もはや悲しくない。そうだろうな、と思うだけだ。

「剛田、覚えてるか？ 近くに縫製工場の女子寮があったよな」

「あったあった。**女工哀史**」

「そんな時代じゃねえだろ。あの頃、よく潜り込んで風呂とか覗いたよな」

「やめろよ……」

実業家ならまあまだしも、一様芸能人がその過去はまずい。

と考えて、ふと思う。

——「ジャスティス剛田が過去に女子寮の風呂を覗いていた！」って、今週刊誌が使ってくれるかこんなネタ？ レイプぐらいやってたならまだしも……

知り合いを装って電話をかけ、「そんなネタは価値がない」と門前払いされる場所を想像してゾットする。

いや、正直剛田は特にゾットしない。

多分門前払いだろうなあ、と他人事のように思えてしまう。

もう芸能人だの、スターだのとしての自分をかなり諦めてきていた。

と、そこでキュッと股座が縮む。

——っていうか、電話して「ジャスティス剛田って誰ですか？」って言われたいとは限らねえぞ。というか若い記者だと知らない可能性のほうが高くねえか？

絶望のさらに下の絶望。

お構いなく、実業家が口を開く。

「ここに来る途中に、女子寮らしい建物があったんだよ」

「え、お前まさか」

「久しぶりに覗こうぜ」

「やめろよ」

「あ、芸能人さまだから、まずいかなあ」

「どう反応すりゃいいんだよ？」

「みつかりやしねえよ。ほら、これ」

差し出すのは、マスク。元プロレスラーが被るには寂しい、コンビニで買った安物だ。

——おいおい、バーに来る前に買っておいたのかよ。引くわ。

「これ被って、いざとなりゃ暴れてなあ、走って逃げる。相手は所詮女だ。俺ら五十近いとはいえ、女に負けると思うか？」

「負けるわけねえわなあ」

「そもそも、見つからなきゃ平気だしな。とはいえ、下積み時代はもう三〇年近く前、防犯設備なんか段違いだろうよ。でも……プロレスリングという**最強の格闘技**で頂点を極めた俺らだ、設備がどうだろうが女子寮にもぐりこむぐらい余裕だろ」

「確かになあ……でも」

「いや、体が大きいだけに見つからないとは言いきれないよな。だけど、女どもを振り払い、走ってぶちぎることができないなんてことありうるか？」

「ありえんわなあ。よし、潜り込むか」

酔っている。

若いころはもっと浴びるように飲んでも酔わなかった二人だが、今は順調に体も衰えて酒にも弱くなっていた。

にもかかわらず、気分的には若いつもりなので、昔通り飲んでしまう。

その状態で、久しぶりに会った一番楽しい時代を過ごした友人に、楽しかった過去をなぞるような行動をしようと言われて、剛田は断り切れなかった。

というより、あまり断りたいとも思わなかった。

——いざとなりゃ、大暴れ。マ〇コどもに俺が負けるかよ。こちとら、生まれたときからキ〇タマぶら下げて来たんだからな。

実際には生まれてすぐは睾丸は体の中で、後から袋の中に降りてくるがそんなことはどうでもいいだろう。

いい年した**後期おっさん**が「女子寮に潜り込もう」と決めたことに比べたら。

女子寮はちょっとしたビルで、体育館を併設した立派なモノだった。

そのビル側の薄暗い廊下を歩く剛田。

見つからないのが奇跡のような状況だ。

若いころの手筈通り、敷地の前後からばらけてはいる。二メートル近い大男が二人並んで侵入しようとするほど脳筋ではない。

——なんか懐かしい感じだな。汗の匂い。女の汗だと思うと……それもスポーツやる年齢の奴のだと思うと、チ〇コが立つぜ……

実際、特に立たない。若いころは立ちっぱなしと思えるほど体力が有り余っていたが、最近は余りその気にならなくなってきた。

と、ロッカールームに差し掛かる。

——下着でもねえかな。

入り、ロッカーを開ける。

不用心というか、皆次々開けられる。剛田が入れるほど大きなものばかりだが、大して物も入っていない。脱いだばかりらしい服が入っているばかりだ。

体育館の明かりがついていたことを思い出す。

——今使ってたんだな。時間からして、まだ間はあるだろう。もうしばらくやって、シャワーして終

わりだ。ちょっと漁ったら、シャワー室探すか。

夜遅くまで訓練していた下積み時代が思い出された。

油断、というか、勘違いであった。

剛田の会社が夜遅くまで練習していたからといって、この女子寮の住人らもそうとは限らない。

しばらくして、廊下から足音が聞こえて震える剛田。

——や、ヤベ……いや、まだだ、そんな大人数じゃない、たぶん忘れ物……

軍隊ではないのだから全員で整列して戻るわけもない。片づけを後輩に任せられる年上の者たちがぼつぼつ戻ってきているだけなのだが、またも勘違いする剛田。

ロッカーの中で、使っていない空の物に入り込む。

閉めてしばらくすると、女たちが入ってきた。

一〇代から二〇代前半ぐらいで、筋肉の発達した健康的な女たち。

「あいつ最近伸びてるよね」

「生意気だよねえ」

「腹筋鍛える名目で腹パンしちゃおうよ。腹筋トロトロにしてやんの！」

「ああいいすねー」

話をなんとなく聞いていて、剛田は感じるものがある。

——こ、この雌ガキども、レスラーだ。

唾をのむ。

たかが女、暴れば何とでもなると思っていた。

だが、女子レスラー。

——おいおい、さすがに**最強武術プロレスリング**をやってる奴らとなれば、たかが女とはいえ多少は面倒だぞ。まあ最後は俺が勝つんだが。あれ？ 数増えてきたぞ……ヤベえ、こいつら忘れ物とかじゃねえ、そうか、終わったやつから来たのか！ そりゃそうだよな！ まずい……いや、ここは使ってないロッカーだから大丈夫だ。それに、いざとなれば腕にモノをいわせりゃいいんだし。

続々と入ってくる健康優良女子たち。興行に出ることを前提として採用されてきたものたちなので、身体能力だけではなく容姿も一定水準以上だ。

——うほ、やっぱりレスラーはかわいい子多いよな。体力もあるし、やるには最高……やべ、チ〇コが。

実際に立ってきた。

久しぶりに、パンツの中で頑強に反り立とうとするので狭い中苦労してポジションを整える。

ロッカールームに、四〇人近い娘たちが詰めかける。

実際のところ、彼女らと剛田の戦力の差はどのぐらいだろうか。

全員と律儀に戦うならさすがに全盛期をはるかに超えた剛田に勝ち目はないだろう。

だが何人か殴り倒し、蹴散らしていくことならまだまだ容易い。

ただし、それはプロレスルールなら、の話。

「あ、そういやこの前の試合、秋部先輩あれ」

「あは、偶然だよ」

笑いつつ、巨乳を揺らして叩く秋部。自分の股間をパンと、何の遠慮もなく叩く。

「女同士だったらさ、別に股間遠慮しないじゃん？ 狙いもしないけど、意味ないから。その癖が男との試合でも出ちゃっただけ」

「で、キーンと」

「カップで掬うように玉をグニュっと……あは、それであいつら、もう動きガクッと悪くなるからねえ。玉を軽くかすってやればもう勝ちはこちらのもの。倒れるほどにしたらさすがに反則負けだから、加減忘れちゃダメよ？」

「やっぱり狙ってるんじゃないですか先輩！」

「ぎゃははは！ 男とやるときや金の玉狙えてね！」

女たちが一斉に笑う。

一人、頬を引きつらせる剛田。

——お、おいおい、こいつら試合で玉を……反則だろ、反則。玉だけは禁止。



全身鍛え上げ、どんな攻撃にも耐えられる超一流のレスラーだった剛田——今もそのつもりだが、当然全盛期と比べると衰え切っている。

しかし、そんな剛田でも弱い部分が一か所あった。

鍛えようがない部分、その辺を歩いている華奢な女の同じ場所より弱い部分がある。

「っていうか、男子レスラーが、女子レスラーより強いみたいな顔してんのムカつくよねえ」

「そうそう、あいつらいくら鍛えても……これ狙われたら一発なのにね」

下着や、練習用の薄い服のままの女たち。

その一人が、がに股になって平らな股間の前でリング二つを作ってみせる。

周りの女たちが手を叩く。

「ちょっと、キ○タマポーズやめなって！」

「女だけで何遠慮するのよ？」

「そうそう、玉キーン、ぶらぶら！」

「ぎやはは！」

練習後だからか、ハイな女たち。

そこかしこで**睾丸しぐさ**を見せる、剛田の前にいる女も当然のように、しかもロッカーに向けて腰を突き出してやってくる。

——俺がいるとわかってんのかよ！？ っていうか若い女がなんて格好……



顔を赤らめつつ、つい股間を見てしまう。

女の股間が前にあれば、見るのが男の本能である。

その前で、リングが躍る。

「タマタマきゅーしよ、急所のボール、男のボールはガチ弱いー、男子の急所のおキンキンー」

「何の歌よ！」

「っていうか、今はナノテクでさあ、タ○キングらいー〇秒で治るんだから、試合でタマタマ狙うのなとか意味わからなくね？ 治らない時代なら、タマタマが大事なのはわかるけど……治るなら別にあんな玉っころ大事じゃねーでしょ？ 潰れりゃ治しゃいいんだし」

キュ、と玉が縮むのを感じる剛田。

——ふ、ふざけんな。この女おかしいだろ。お前ら、否定しろ。

「ぎやはは！ そうだよね！」

「玉保護ルールはもう時代遅れ。**アップデートせにゃいかんぜよ**」

「金ちゃん攻撃解禁してさ、あらゆる格闘技は男女混合にすべきだよ。それでこそ真の最強がわかる」

「え、でも男に触られるの嫌じゃない？」

「嫌な触り方した野郎は**睾丸握り潰す**」

「え、それじゃ嫌な触り方しなかったらタマタマ狙わないの？」

「嫌な触り方しなかった奴も**睾丸握り潰す**」

「同じじゃん！」

「勝つためだから！」

「それと、男のほうが女より強いとか思ってる腐れゴールドくんたちへの躰」

「あんな狙いやすいところにある最大急所をルールで守ってもらって、「男のほうが強い」とか引くわー、勘違いに引くわー」

「どんな強い男だろうが……それこそ伝説のスター、ジャスティス剛田・細野だろうが、みんなで金の玉狙っていけばねえ」

「そりゃ普通の男の人と同じでしょ、金の玉ぶら下げてるなら」

「っていうか、あの人たちやっぱ大きいのかなあ？」

「そりゃレスラーはみんなデカチンよ。特にあんなスターなら、あは……**五〇センチはある**と見たね」

人並みの玉竿を縮ませながら、唾をのむジャスティス剛田。

——ヤベえ、最悪だ。やっぱりこの子ら後輩だけに俺のことも知ってる。マスク取られたらアウト……身元即座にばれる。いやいや、そういう問題じゃなくて、こいつら……こいつらが……

思わず、縮んだ肉玉を揉む。

——ここを集中攻撃してくるってことだ！ さ、さすがにそれは……クソ、それならこっちにも考えがあるぜ、こっちも遠慮なくキ〇タマ蹴り上げて……あ、無理だ、こいつら、全員玉無しだ。マ〇コー色……「マ〇コー色」がこんな嫌な意味を持つ場合もあるんだな。というか、こいつら自分になりから、遠慮なく狙ってくるんだな。蹴り返されると思ったらなかなか蹴れねえもん……

と、ロッカーに人が駆け込んでくる。

事務員らしい、普通の中年女。

「大変よ！ これ見て！ 防犯カメラに人が！」

「え、ウツソ！」

「おいおい、女子レスラーの巣に潜り込むとか……普通の女子寮でも変態野郎なんて寄ってたかって抑え込まれて**キ〇タマ踏み潰される**のに、レスラーとなればねえ、もう、金的の練習台にして何回潰されるかわかんねーっすよ？」

「もはやDMがわざと飛び込んで来るとしか思えませんわなあ」

「DMの陰キャかー、どうしようもないですね」

「全くよね。男の中の男である、ジャスティス郷田・細野の爪の垢を飲ませてやりたいわ」

——こいつら俺らが入っているとわかってんじゃねえのか！？

事務員が持ってきたタブレットに集まる半裸の女子たち。

防犯カメラの映像が再生される。

いくつものカメラの画像がいくつものウィンドーで出る。

「ほら、ここから侵入して、こうって……廊下で……あれ？　ここ？」

「やだ、ロッカールームにも入ってたんだ！」

「何か盗まれてないか心配ね！」

「え、ちょっと、今先輩たち入りましたよ」

「うっそ！　あいつ出てないじゃん！」

「げ、なんかホラーでこういう話あるような」

「でも、この状況なら全然ホラーじゃないね」

「そりゃ四〇対一で、一人のほうが一方向的にキ〇タマばかり狙われるんじゃ笑い話よね」

「あ、その一人にとってホラーかも」

「どこに隠れてんのかなあ？」

「とりあえず、空いてるロッカー開いてみようぜ」

「ナノ薬いくつ持ってる？」

人体再生用のナノメカが入ったカプセルである。

「ビンいっぱいあるよ」

「私も」

「私も」

「私も」

「飽きるまでキ〇タマ潰しできるね！」

「私玉潰ししたことないんだ」

「あれ一回やとくべきだよ！　男が怖くなくなるもん！」

「そうそう！　デカイ顔してるけどあんたも男であるからにはキ〇タマ弱いんでしょ？　って思えるのよね」

「男は弱いー、キ〇タマ弱いー」

「急所を狙え、急所を狙え、か弱い女は急所を狙え、男の急所を狙っちゃえ」

「って、私ら明らかに弱いけどね」

「格闘で鍛えた女が急所潰しに来るって男にとっては恐怖だろうねえ」

「か弱い女対普通の男キ〇タマつき、の形でも男のほう不利なのに……強い女対普通の男キ〇タマつき、じゃ、もう男に勝ち目ねーもん」

「というより強弱と関係なく、片方だけキ〇タマ付いてる対決は付いてる側に勝ち目あんまりないよな」

「玉ばかり狙っていけばね」

「だから試合じゃ禁止なのねー、**男有利のクソルール**」

「玉潰れたら困るから……という大義名分が昔はあったけど、再生可能な今はどういう名分があるのかなあ？」

数人が出口を固め、天井や物陰、机の下を探りつつ、本命のロッカーを取り囲む。

「ほかにはいないわね」

「それじゃやっぱりここかー」  
「出てきてください、タマタマの安全は保障しますから！」  
「さっきからの話聞いてて、信じる奴いるわけねーし！」  
「さっさと出てきなさい、コーガン潰してあげるから！」  
「それで出てくるわけねーじゃん！」  
「ぎやはははは！」  
部屋を震わせるほど笑う女たち。  
マスクの下で眉を吊り上げる剛田。  
——舐めんなマ○コども！  
ロッカーを開ける。  
「え」  
「うわっ」  
「デカイよこいつ！」  
「ガキども、かかってこいや！」  
「へえ」  
「態度もデカいんだあ」  
「おチ○ポもさぞでっかいんでしょうねえ」  
「後で確かめてやるからなー」



いくら剛田が男で巨体とはいえ、四〇対一である。

格闘技を訓練し、相手にしかない急所ばかり狙う気である女たちが怯む理由はない。

チラ、と周りを見る。

狭い。

だが、完全に押し込まれはいない。

自分が入っていたロッカーの戸を掴み、紙のように蝶番を引き千切る。

「え」

はじめから蝶番を壊しておいたのかと思えるほど、あっさりと引き千切る姿に目を見張る女たち。

「おいやあああ！」

振り回したいが、そこまでの広さはない。前の連中に叩きつける。

とっさに防御し、顔に叩きつけられることもないが、顔を歪めて仰け反る女たち。

「きゃあああ！」

「いたっ！」

「この野郎！」

「キ〇タマ蹴って！ キ〇タマ蹴って！」

「玉だけ狙うのよ！ 玉だけ！」

「一発当てたら男は終わり！」

「当てたら押し倒して、みんなでとりあえずキ〇タマ踏み潰しましょ！」

「め、雌ガキども……」

「その雌ガキにだーいじな金の玉潰されるのよ。き・ん・の・た・ま、潰されるのよ」

「変態野郎が……ガチでキ〇タマ潰す」

「おっさん知ってる？ あんたたち男がおまたにぶら下げてるそれ、大事なモノ、女の子でも踏んだら簡単に潰せるんだよ？ 急所、きゅーしょ、きゅ・う・しょ。ぐっと踏んで右の玉、もう一度踏んで左玉、チン〇ンあっても男終了」

「うおおおお！」

腕を振り回す。

距離をとる女たち。

それなりに広いロッカーだ。

本来ならもっと距離をとって包囲するつもりだった。

しかし、剛田の剛力を見て考えが変わった。

「あんまり開けちゃだめよ！ なんか振り回される！」

秋部の叫び。

全く、彼女は正しかった。

普段なら、とりあえず相手が疲れるまで、腕を振り回している間は距離をとる。

だがそんな普通の男をゆっくり包囲して玉ごと押し潰すようなやり方をすれば、今度は剛田は自分が入っていたロッカーを固定する釘をものともせず引き千切り、頭上で振り回したことだろう。

そうならばとても踏み込めない。

突破されかねない。

しかしある程度距離が近ければ、ロッカーを引き千切ろうとすればそこに突っ込まれる危険がある。

となれば、腕を振り回すしかない。

腕ならば、何とか対処もできる。

「きゃあっ！」

「先輩！」

防御の上から殴られた娘の一人が吹っ飛び、仲間数人ごと床に倒れる。

青ざめつつも、引かない娘たち。

「クッソ、女の子相手に恥ずかしくないの？」

「それでもおっさんキ〇タマついてんの？ おばちゃんなんじゃね？」

「玉蹴ろ玉蹴ろ！ 男なんてどんなに威張っても、金的キック一発で「ほぐろう」なんだから！」

「雌ガキども！」

わめく。

わめきつつも、膝を締めざるを得ない。

それでは踏み込めず、攻撃にも防御にも支障をきたす。

それを見てニッとほほ笑む娘たち。

「見て、膝締めてる！」

「怖いよねー、お股への攻撃が！」

「わからないわー、こんなところ、いくらでも叩いてもらって平気なのに。ほらほら」

「だよねえ」

ポコポコと、多少距離のある娘らが自分の股間を叩く。

「た、玉無しども……」

マスクの下で顔を赤らめる剛田。

「あはは、そうってあげないでよ、男の人はねえ、そこに特有の……臓器があるんだから」

「えー、臓器？ 男の人は、ここに臓器ぶら下げてるんですか？」

全部わかっている、小芝居をしている。

それが、ニヤニヤと自分の股間を見てくる目線ではっきりとわかる剛田。

「ぶっ殺す、お前らぶっ殺す」

「やだ、怖ーい」

「でも、私たちは殺さないよ」

「女の子に寄ってたかってコーガン二個とも潰されて生きるほうが殺されるよりきついかもねー、とか考えないで行こうね」

「女による金潰しは男としてのその人を全否定する一番わかりやすい行為だもんね」

「あんたとはエッチしない、もちろん子種も欲しくない。一ミリも、必要ないからコーガン潰す」

口金的。

急所攻撃をしつこく示唆することで、股間への警戒を高め、他のことに意識を向けられないように

していく。

目に見えて剛田の動きが悪くなってくるのにほくそ笑む女たち。

「くそあああああ！」

しかし、そのまま縮こまる剛田ではない。それではスター選手にはなれない。

あえて踏み込む。大股開きで、拳を振る。

防御を突き破り、一人の娘の顎を殴りつける。

吹っ飛ぶ。人形のように。

「ひっ」

「怯むな！ キ○タマ！」

「このクソ野郎！」

あまりの勢いに凍り付く娘たちだが、毎日格闘の訓練をしている者たちだ、すぐに剛田に向けて踏み込み、急所狙いの爪先を振り上げる。

見事にもう、急所だけ狙ってくる。

素早く足を締め、防御する剛田。

「へっ、マ○コども……男に女が勝てるかよ！」

「いやいや……あんたが女だったらこの状況楽勝でしょ。十分それだけの力があるよ」

「そうそう、でも余計な弱点ぶら下げてるからビビりつつ戦うことになるわけで」

前の女たちが剛田の顔を見る。

ほかの場所を見ないようにするかのよう。

突出した彼の後ろに回った仲間を見ないようにするために。

その手には、誰かが脱いだシャツ。

バサリ、と剛田の頭に向けられる。

「あああああ！」

わめく、喚き、シャツをつかむ剛田。

周りの女の目がギラリと光る。

「今よ！」

「キ○タマ！ キ○タマ！ キ○タマっ！」

殺到、振り上げられる爪先。

しかし、視界を奪われつつも素早く剛田は膝を締めて股を閉じていた。

太ももや脛にゴンゴンと女たちの何の遠慮もない金蹴りが当る。

何のダメージもない。

それでも、剛田は震え上がる。視界を奪われ、周りの女たちが本気で急所ばかり狙ってくるのだ、恐怖しかない。

「ひいいいっ！」

シャツを引き千切る。

と、前に秋部。

しゃがみ、拳を振りかぶっていた。

「あっ」

「潰れろっ！」

ぐちよ。

男の太ももの付け根に女の拳が叩きつけられる。

膝を締め、玉を太ももの間に挟み込んでいる剛田。

振るタイプの攻撃からはかなり玉が守られている。

だが前から突き刺す形だと、難しい。

「ふぐっ」

「やった！」

「ばっちり金的！」

「さすが秋部先輩！」

「ふんぐうううう」

腰を引き、股間を押さえようとする剛田。

「まだよ！ まだ浅い！」

剛田に飛びつく。そして膝。

前からを押し付けるように膝金。

「ちょごっ、やめ」

「潰れろ潰れろ潰れろ潰れろっ！」

格闘技を収めている女性の鍛錬を積んだ膝蹴りが、防御力を高める方法もない、最初から最後まで最弱以外の状態になりようもない絶対急に叩き込まれる。

陰囊であり精巣であり睾丸であり男の命であり男性器であり、とにかく男の体で最も弱い、いや人体で最弱の部分。それを持たないから、いざとなれば特に何の躊躇もなく全力攻撃できる女性の膝がすべてを磨り潰そうとするかのようにしつこく突き刺される。

「ごあああああああ！」

「やっちゃえやっちゃえ！」

「玉、玉、玉、玉！」

「大丈夫です先輩！ ナノテクでタマタマはすぐ治ります！ ガチで潰しちゃってください！」

「秋部選手、変態男の金の玉への情け容赦ない膝蹴りの嵐！」

「ぎゃはは！ すげー痛そう！」

息を止めて連続膝蹴りを行っていた秋部。

大きく息をついて離れる。

と、白目をむいた剛田がその場に音を立てて崩れる。

「よっしゃー！」

「やった、女の勝ち！」

「あんだけ強い、怪物みたいな奴だったのに……」

「金の玉狙われたらやっぱり男はだめねえ」

「勝者、女の子！ チン○ン付いてる生き物よ、これを見ても言えるのか、男は強いといえるのか！ 金的蹴られて言えるのか！ 女に蹴られて言えるのか！」

マイクを持ったような手つきで叫ぶ娘。

激闘を制した興奮で、なぎ倒されて口から血を出している娘も元気に跳ね起き、喜びを分かち合っていた。

一人、睾丸を蹴り潰されて泡を吹き気絶する剛田。

「で、このおっさんどうする？」

「警察に突き出すほどの事でもないよね」

「だよねえ、たかが覗きだもんね」

「だから、私らでお仕置きするだけで許してあげるといって温情かけるってのはどう？」

「それな！」

「まあ、ぶっちゃけ警察に突き出されたほうが絶対楽なぐらい……みんなで大事なモノ、潰しまくるんだけどさ」

「でもまあ、この年でパクられるのはヤバそうだし、苦しくてもキャン玉潰しのほうがいいんじゃないかな？」

「んー、その辺、どういう選択するのか起きたら聞くとして……別にどういう選択してもタマタマ潰しの後で解放というこっちの予定は変わらないけど、とりあえず体育館だね。防音もあることだし」

拷問する気満々の女たちに担がれ、連れ出されていく剛田。

体験版終わり

この後さんざん金責めを食らい、

解放されそうなところに相棒がやってきてさらに金責め拷問続行となり、

金責め好きの女性がSNSを通じて集まり、延々玉踏み潰し祭りを続けたり

という感じになります。

続きは製品版でぜひお楽しみ下さい。